

T・ギロピッチ著
人間この信じやすきもの
 迷信・誤信はどうして生まれるか

「人々は常に、ものごとの白黒がはっきりしていることを好み、考えを過度に単純化しようとし、自分の信念に過剰な自信をもちたがるものである。」(訳書P34より) その結果として起こる数々の誤信。本書は、そのオランダ語である。たとえば(第一部、第二部の6つの章に対応)

- ・ランダムなデータの中に勝手に規則性を見いだしてしまう
- ・わずかな、しかも偏りのあるデータに基づいて決めてしまう
- ・思い込みでものごとを見してしまう
- ・見たいように見してしまう
- ・伝聞情報を簡単に信じてしまう
- ・自分の意見が他の人からも支持されているように思ってしまう

これでもかこれでもかと思われる誤信のいずれもが、ことごとく「そう言われてみればなるほど」と「信じさせ

「人々は「**誤信**」させるために必要な、有益な、おもしろさのテクニックを使って(本書より)——提出される。「人間この信じやすきもの」は、果たして種として生き残っていきけるのかにまで思いをほせてしまうほどである。

人間が生きていくには、エ

だまされないための指南書

「誤信」の積極的な意義を知りたい

海保博之

「誤信」をし、それに従って自らの行動を御していかねればならない。

効果のある健康法を實踐し、偶然に起こったことの中に自然の摂理を読み取り、怪しげな超能力に驚いたりしながら日々の生活をしている(第三部より)。そこには、とんでもない危険をもたらす可能性がある一方で、しかし、「確信的に生きていく」ための有効な方略という側面もあるはずである。もし「そうでないとするなら、人間はとっくの昔に滅びていなければならぬであろう。

一体、「誤信」のどこが、生きるための「適応的な方略」なのだろうか。そこが知りたいのだが、本書では、「誤信」はあくまで「誤信」であり、確率論的な科学教育と社会学の方法論を身につけることによつて、「誤信」を正す方法を、最後に簡単に説いておしまひである。物足りない。科学教育や社会学のエキスパートでさえ、日常的な状況では、「誤信」をまぬがれないのだから。

「しろく」と(誰でもが領域によつてはしろくとなる)が日常生活のなかで展開する理論と、「学問的な」理論とは、必ずしもその内容も

使用方も同じではない。それれ固有の世界がある。両者はまったく無関係ではないが、一方が正しくかつ有効で、一方がダメという見方は単純過ぎるであろう。「誤信」にはもっと積極的な意義があるはずである。それは何なのか。そこまでの突込みを本書に期待するのは、ないものねだりかもしれない。しかし、状況との積極的なかわりの中で生きる人間の活動に目を向ける最近の認知科学の動向は、そうした方向での「誤信問題」へのアプローチに傾斜している。

とはいっても、日常生活の中で「誤信」が人間に多大の不利をもたらすことがあることも事実である。たとえば、意図的に「誤信」を誘発するような情報環境を提供されて不利を被るようなケースである。「だまされない」ための受け手の側での心理的な力が必要である。その指南の書として、本書は貴重である。(かいほ・ひろゆき氏)

筑波大学教授・認知心理学専攻)

読 文
 物 化

ボケ(一切の判断の停止)というわけにはいかない。限定された状況で瞬時に次々と

人間 ● T・ギロピッチ
 この信じやすきもの

- 理性ある人もない人も
- ともにおちこむ
- 人間心理の扉と穴!

守一雄 / 守秀子訳
 46判・356頁・2900円
 新曜社

論とは、必ずしもその内容も

★トーマス・ギロピッチ
 (一九五四)はコーネル
 大学準教授、実験社会心理
 学・認知心理学専攻。カル
 フォルニア大卒。